

地域における極低出生体重児のEarly intervention (早期介入) システムの確立とその効果

分担研究報告書

分担研究者： 前川喜平¹⁾

研究協力者： 松石豊次郎²⁾

共同研究者： 福田清一³⁾、山下裕史朗²⁾、井上寿郎²⁾、原 淳二⁴⁾、
木村美由紀⁵⁾、黒岩祥子⁵⁾、橋本武夫³⁾

要約：我々は極低出生体重児に対するEarly Intervention (EI)システムを確立するためパイロットスタデイを行ってきた。またEIの効果を判定するため新版K式を用いた発達評価、および子どもの日常生活の行動様式についての親の評価の客観的判定基準を作製してきた。今回久留米市の全面的なバックアップのもと、極低出生体重児のEIが市の事業の一つとして定着し予算化された。現状と将来像について述べる。

見出し語：極低出生体重児、early intervention、発達評価、親の満足度、地域システム

緒言：近年、周産期医療の進歩に伴い、極低出生体重児の救命率は改善してきた。欧米諸国および本邦から極低出生体重児の短期、長期の神経学的予後の調査が行なわれ、従来、正常および境界と思われていた児に学習障害などの少なくなることが指摘されてきた。また、児の発達に影響を及ぼす家庭環境や両親の養育態度の重要性も強調されている。人口23万人の中都市(久留米市)におけるEIのシステムを紹介する。

研究目的・方法：久留米大学、聖マリア病院母子総合医療センター、および周辺市で出生し明らかな障害をもたない極低出生体重児を2歳時に新版K式発達テストおよび小児科、小児神経学的診察を行なう。対照群は同じ施設の極低出生体重児の2歳になった児で、遠距離のためにEIプログラムに参加できない者である。また親からみた子どもの生活行動パターンの評価問診表を作製した。これらの評価法はEI開始前と終了時(3歳時)で施行し、対照群と比べる。EIの場所は久留米市の療育機関である久留米幼児教育研究所プレイルームとスタッフに協力してもらう。その他ボランティアの医師、保母、臨床心理士である。

結果：現在のシステムを図1に示した。久留米市のみでなく佐賀、小郡、春日、八女、大川、柳川などの周辺都市の極低出生体重児である。久留米大学、聖マリア病院で出生した児は情報を病院新生児センター退院時に知らせる。また、久留米市では市政だより、その他の案内をみて幼児教育研究所に電話し問い合わせがある。現在登録者は23名である。現在EIに報告されている児の発達検査は17人で施行中である。

考察：我々は現在まで極低出生体重児の診察方法、発達の評価方法について検討、報告してきた¹⁾²⁾。現在までに行なった研究では、月に1回のEIでは、新版K式を用いた児の発達指数の有意の改善は見られていない。今後多施設で症例数をプールして統計解析が必要である。

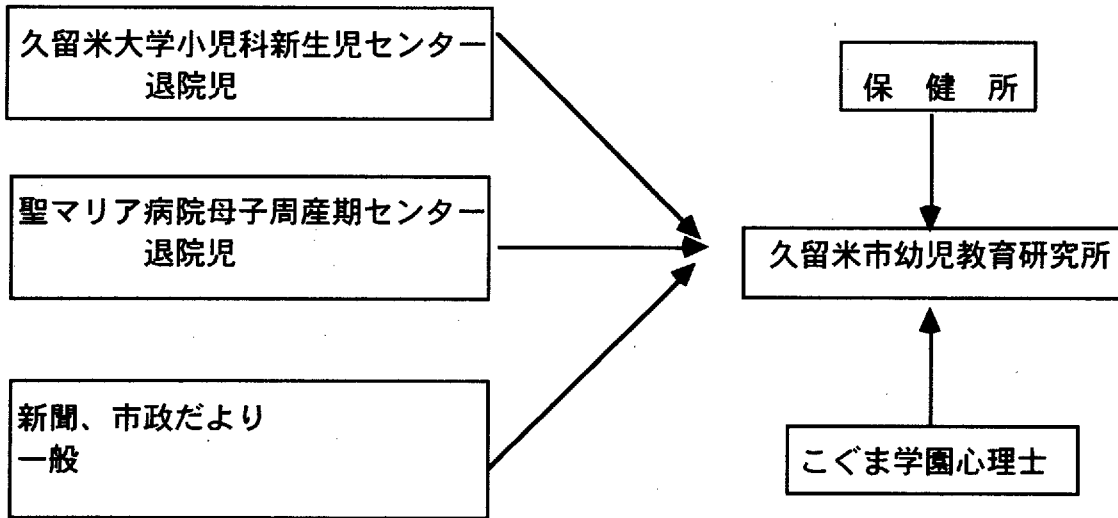
また親のみた子どもの生活行動パターンの評価はことばの発達、子どもの行動量の変化、子どもの気分の安定性に有意の傾向がありすでに報告した³⁾。現在、子どもの生活行動パターンの質問、評価表を再検討中で、今後全国多施設での有効性を証明する事が必要である。子どもの生活行動パターンでは統計学的有意差のみられなかった項目でも、EI群が対照群より常に上位であり、親の満足度、育児不安の解消にも役立っている事が示唆された。

文献

- 1) 松石豊次郎、石橋紳作、極小未熟児の発達小児の精神と神経 1994;34;5-13.
- 2) 石橋紳作、松石豊次郎. 神経学的評価の問題点未熟児・新生児のフォローアップ。Neonatal Care 1995.74-80
- 3) 松石豊次郎、石橋紳作、山下裕史朗ら。極低出生体重児のearly intervention. 脳と発達 1996: 28;149-155

1)東京慈恵会医科大学小児科 2)久留米大学小児科 3)聖マリア病院母子総合医療センター新生児科
4)久留米市幼児教育研究所 5)こぐま学園

1)Jikei University, Dept of Pediatrics 2) Kurume University 3) Department of Neonatology, Medical Center for Maternal and Child Health, St Mary's Hospital 4) Kurume City Early intervention and Education Center, 5) Koguma Intervention Center for the Handicapped.





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:我々は極低出生体重児に対する Early Intervention (EI)システムを確立するためパイロットスタディを行なってきた。また EI の効果を判定するため新版 K 式を用いた発達評価、および子どもの日常生活の行動様式についての親の評価の客観的判定基準を作製してきた。今回久留米市の全面的なバックアップのもと、極低出生体重児の EI が市の事業の一つとして定着し予算化された。現状と将来像について述べる。